「志発島で起きた日本人とロシア人の物語」制作に寄せて

樫本　真奈美

「僕の原稿を翻訳してくれませんか？」

二〇二一年、見知らぬロシア人からメールを受け取った。「南クリル諸島（南千島）で起こった日本人とロシア人の友情、人間の決断と運命について書いた物語です」と書いてあった。

メールの主はバチャエフというロシア人脚本家で、友人の思いを実現したいとのことだった。なんでも、その友人アンドレイの母親は子どもの頃、家族で北方四島のとある島に移り住んだ。一九四七年に島から日本人が強制送還される日、悪天候の中でロシア人の子ども数人が乗った「箱舟」が沖に流されてしまい、ある日本人が子どもたちを救出したという。

当時、引き揚げ船を逃すと日本に二度と行けないと言われていた。その救われた子どもというのがアンドレイの母親で、「命を救ってくれたあの日本人とその子孫を探して欲しい」という母親の遺言を守り、アンドレイはソ連崩壊後にビザなし交流に何度か参加して「ヒロ」という名前の日本人を探そうと試みたそうだ。残念ながら、聞きなれない日本人の名前を正確に覚えていなかったのか、「ヒロ」という名の人物、それらしき人の手がかりは見つけられなかったという。

この実話をもとにした物語ということだった。半信半疑でざっと原稿に目を通すうちに引き込まれていった。

舞台は志発島（しぼつとう）、歯舞（はぼまい）諸島を構成する島の中で最大の面積を有する島である。

一九四七年、日本人強制送還の日。ロシア人との「共生」生活も約一年が経った頃、島の沖に見慣れぬ貨物船がやってくる。ベテラン漁師の浩は息子の勇夫と一緒にいつも通り海に出て魚を釣るが、ふたりが乗る船はエンジン付きのポンポン船ではなく「箱舟」だった。浩は船の操縦と漁のやり方をロシア人に教えるうちに、互いに信頼関係を築いてゆく。他、日本の船職人のもとで船作りを学ぶニコライ、その娘のカーチャと勇夫の恋心、誠とヴェーラの秘密の逢瀬、強制送還の任務を担った内務人民委員部の冷徹なフロロフ、ソ連当局と日本人の狭間で苦悩する日本語通訳のカジン、引き揚げ船に

「もっこ」で吊られて乗せられる日本人、ロシアの子どもたちの遭難、決死の救出劇……。大陸から入植したロシア人と故郷を追われる日本人、それぞれが織りなす人間ドラマには単純な二項対立をはるかに超えた魅力がある。

二〇一四年に『ジョバンニの島』というアニメ映画が公開された。色丹島（しこたんとう）を故郷にもつ得能宏さんの体験を中心に、ソ連占領下の島の様子を主人公の子ども目線で描いた素晴らしい作品だ。

この作品に比べると、『舟』（仮題）はロシア人がロシア人の目線で描いた作品であるため、ロシア人の微妙な心理もたくさん描かれている。

第二次世界大戦で日本が終戦を迎えた後、ソ連軍が日ソ不可侵条約を破って千島列島を占拠した。ヤルタ会談でスターリンとルーズベルトの間に密約があったことなど、当時の一般庶民は知る由もない。ソ連軍が南千島まで占拠した後は、一般のロシア人の入植が始まった。当時、ソ連政府は仕事と住居を保証することで千島列島への移住を募集した。応募した男性の多くはドイツ戦で負傷し、故郷に帰還するも職につけない人たちだったという。

一九四六年の「米ソ引き揚げ協定」によって、北方四島の島民たちは順次樺太（からふと・サハリン）経由で函館に送還された。約三年間で数回にわけての強制退去だった。当時、大陸から新たに入植したロシア人は海の知識に乏しく船の操縦も不慣れだったため、引き揚げを待つ日本人と「共生」する間に漁の技術を学んだ。歯舞諸島は北海道に近いこともあり、ソ連軍進駐を恐れて持ち船で北海道に逃げた日本人もたくさんいたが、島に残った日本人が所有していた船はすべて没収され、逃げないように銃で撃たれ穴を空けられた船も多かった。ロシア人は日本人漁師と二人一組のペアになり、操縦を習得した。日本人に対しては、魚を入れる木箱を舟の代わりにして釣りをしたり、移動することは許されたという。先に触れた「箱舟」とはまさにこの木箱のことで、ロシア人の子どもたちもこの箱舟に乗って沖に流されたのだ。

作者バチャエフによると、友人アンドレイが二年前に亡くなり、そのひと月後に偶然インターネット上で私のことが目にとまり、すぐにメールを寄こしたという。「アンドレイがあの世から手助けしてくれた」と感じたらしい。

いっぽう私は、終戦直後の千島列島の出来事と聞いた時、自分なりの運命を感じていた。

二〇〇三年から一年間、サンクトペテルブルグに留学をした。私にとってこの時のロシア留学は、「マリーナ」というふたりの女性なしには語ることができない。ひとりは、ロシアを代表する詩人マリーナ・ツヴェターエワ（一八九二～一九四一）。ほぼ衝動的にロシア留学を決めたのは、無謀にもこの天才詩人を原書で読み、卒業論文を書きたいと思いたったからだった。もうひとりのマリーナはペテルブルグの画家で、いわゆる「ペレストロイカ世代」に属する友人だった。二十歳前後の青春時代に国の崩壊を経験した人たちはとにかくたくましい。彼女のおかげで様々な出会いがあり、私の留学生活はとても豊かになった。

マリーナの家のリビングには日本のお椀や重箱が大事に飾られていた。不思議そうに見つめる私に、「うちのおばあちゃんは子どもの頃にサハリンで暮らしたことがあるのよ。その時、日本人の家族と仲良くなったんだって」と説明してくれた。そのおばあさんがいる部屋のドアはいつも閉まっていたので姿を拝見したことはなく、高齢でほぼ寝たきりだと聞いていた。

正直に言うと、私はこの時、この「サハリンで暮らした」という言葉の意味、いや、重みをよく理解していなかった。当時は空前の和食ブ

ーム。ペテルブルグで最も高価なレストランは和食「サクラ」で、庶民には手の届かない場所だった。料理好きのマリーナにも和食を作って欲しいとたびたびせがまれたので、日本文化に関心があるんだな、という程度にしか受け止めていなかったのだ。

今思い出しても、自らの無知を恥じるしかなく、情けない。決定的な出来事はその後起こった。

年末年始はこのお宅に招かれ、年越しをすることになった。大晦日の夕方に家族や親しい友人達で集まり、朝まで大騒ぎをするのがロシア流の年越しだ。私はスネグーロチカに扮し、プレゼントを配る役割まで仰せつかった。宴もたけなわ、盛り上がっているところに「うちのおばあちゃんがね、日本人がいると聞いて会いたいと言っているの。いいかしら?」と告げられると、ご家族に手を引かれてゆっくりと歩いてこられた。

私の顔を見るなり、開口いちばん「おはよう」「おいしい」「うま」「ありがとう」といった日本語の単語（この四つははっきりと覚えている）を何度も懸命に繰り返したのだ。文章になっていなくとも、おばあさんの気持ちが十分に伝わってきた。皺だらけの顔がほころび、目には涙が浮かんでいた。それからおばあさんはロシア語でこう言った。

「わたしのお父さんは軍人だったのよ。ペテルブルグからサハリンの日本人の家に引っ越して、しばらく同じ屋根の下で日本人家族と暮らしたの。日本人の子どもたちといつも一緒に遊んだのよ。日本人が去る日の前日の夜は、大きな広間で日本人家族とわたしたち家族みんなで一緒に手を繋いで寝たのよ。そして、別れの当日はお互いにこれ以上ないくらいに泣いて泣いて、一生分の涙を流したんじゃないかしら。二度と会えないとわかっていたから……。」

言いようのない感動に包まれ、私も涙が溢れた。

それから終戦直後の千島列島、南樺太の史実を知るたびに、もっとこのおばあさんに話を聞いておけばよかった、と何度も後悔した。

『舟』（仮題）に話を戻そう。

この作品を翻訳しながら、裏付け作業を進めた。ロシアと日本でこの事件を知る人や、事件のことを記した記事などが見つからないか、片っ端から情報収集を試みた。日本では元島民の手記が様々な形でまとめられており、引き揚げ時の様子を詳細に知ることができる。また、関連団体や自治体に問い合わせれば何か知っている人が見つかるのではないかという期待があったのだが、残念ながら今に至るまで見つかっていない。しかし、根室市職員の谷内紀夫さんのご協力のおかげで、この話を「聞いたことがある」という元島民の方がおられることがわかった。

二〇二二年六月、根室へ。

子ども時代を志発島で過ごし、ロシア人との「共生」、引き揚げの記憶を持つ木村芳勝さん（一九三四年生まれ）にお話しを伺うことが目的だった。この「箱舟救出事件」に関する記憶は残念ながら「親から聞いたことがある」という程度だったが、ソ連軍上陸時の様子、家にソ連の軍人が初めて来た時のこと、徐々にロシア人と打ち解け助け合ったこと、ロシア人の子どもたちと一緒に遊んだことなど、貴重なお話を聞かせていただいた。

さて、問題はロシア側の証言だ。脚本家の話を疑うわけではないが、とにかく客観的な裏付けが欲しかった。こうした話は語り継がれるうちに多かれ少なかれ美化されるものだが、双方の国にとってデリケートな題材であるだけに、

フィクションだけを発表するのは気が進まなかった。生きた証言があるからこそ意味がある。ロシアの脚本家は「ロシア人は日本人みたいに長生きしないから、元島民なんて生きてない」と決めつけ、最初は探そうともしてくれなかった。「これはドキュメンタリー映画ではないからこれでいいんだ」の一点張り。ソ連生まれのロシア人男性は頑固で偏屈なのか。それなら私にも考えがある。関係者の証言がなければ本は出版しない、と突っぱねた。せめて亡くなったアンドレイのご家族に連絡をとり、他にこの話を知っている人を探し出すよう説得した。アンドレイに兄弟姉妹がいれば、同じ話を聞いているはずだ。ロシアこそ「口コミ」文化ではないか。必ず誰か見つかると予感していた。

やはり思った通りだった。

亡くなったアンドレイの妹さんが現在色丹島に暮らしていて、同じく母親からこの救出劇のことを聞いて育ったという情報を得た。しかも、母親と一緒に箱舟に乗っていた叔母さんがウラジオストク近郊の町にご存命で、日本人に助けられたことを直接語ってくれるというのだ！

諦めてはいけないし、決めつけてもいけない。その叔母さんのところにすぐさま飛んで行きたい思いだったが、ここで新たな問題が生じた。二〇二二年二月のロシアによるウクライナ侵攻が原因で日本からウラジオストクに行く直行便がなくなり、「2時間で逢える日本―ウラジオストク」のはずが、六〇時間もかかる場所になってしまった。旅費も異様に高い。「非友好国」というレッテルの洗礼をさっそく浴びる羽目になるとは……。幸い、ご高齢（一九三八年生まれ）で入院されているものの会話はしっかりできるとのことで、質問事項を用意してバチャエフにインタビューを任せ、話を記録してもらうことになった。アンドレイの妹さんが、叔母さんに電話でも話が聞けるようにしてくださったうえに、貴重な家族写真も提供してくださったのでとても感謝している。

また、この家族と同じ時期に志発島に移住し、この「箱舟救出事件」のことを書き記したロシア人がいることもわかった。第三者の客観的な証言としてとても貴重であり、ここから、ロシア人の子どもを救出した日本人に関する新たな情報も得ることができた。海を知り尽くした日本人漁師が風向きや潮の流れを考慮して見事に救出したことがわかったのだ。当時の入植したロシア人から見れば神業に見えただろう。いっぽう、この漁師にとってはそう難しいことではなかったのかもしれない。だから周囲や子孫に語り継ぐこともなかった……。日本側に証言が見つからないのは、こうした事情だったのかもしれないと推測している。

実際、ロシアのウクライナ侵攻はこの企画を進めるうえで重くのしかかっている。ロシア側で映像化することを前提にすすめてきたが、二月二四日以降、反戦デモに参加したスポンサーが拘束されたり、ロシア政府や行政の支援も立ち切れとなった。ロシアでは出版、映画界でも日々検閲が厳しくなり、「クリル諸島」にまつわる作品に関わることを恐れて協力者が離れていったことにバチャエフは苦悩し、私も胸が痛んだ。そして何より、挿絵を描いてくれたイラストレーターが昨年十月から始まった部分的動員の後、国を出てまで作品を納めてくれた。この作家の名前や情報はしばらく明かさないことで合意している。

また、ウクライナへの軍事侵攻を受けて日本政府が制裁を科したことに対する反発として、ロシア政府がビザなし交流などの両国の合意を破棄したことや、根室の夏の風物詩で地元の漁業従事者にとって死活問題となる「棹前こんぶ漁」の操業条件交渉が遅れたことなど、二〇

二二年の不穏な報道や元島民の方々の悲痛な声を目の当たりにした時、これまで日ロ双方の地元の自治体と民間が協力して行ってきた地道な「対話」の努力の尊さを改めて感じた。これこそが、日本が抱える領土問題のうち北方領土が特殊である点だと思う。日ロ両国は領土問題の存在を認め、少なくとも「話し合い」を行ってきた。首脳会談の交渉内容に対しては様々な意見はあるだろう。しかし、係争地の双方の住民同士が「いがみ合っていない」ことは稀なことであり、解決の可能性を信じて互いに信頼関係を築こうと尽力されてきた当事者の皆さんの努力の賜物なのだ。

かつてペテルブルグでマリーナおばあさんの話を聞いて感じた言いようのない感動は、おそらくこういうことだったのだ。日本人とロシア人の家族が手を繋いで寝て、別れる時はこれ以上ないほどに泣いた……。立場を越えて人と人が互いに寄せる信頼、友情。両者が手を取り合うまで、どれほどの感情を乗りこえただろう。

余談だが、一九九二年に始まったビザなし交流で初めて根室を訪れたロシア人が乗った船が「マリーナ・ツヴェターエワ号」だったと知った時はとても驚いた。何かの縁を感じ、この物語を日本の読者に必ず届ける、その思いをより強くしたのだった。

『舟』（仮題）の物語は二〇二三年に東京の晧星社から出版予定で、付録として、志発島元島民の木村芳勝さんのインタビュー、「箱舟」で沖に流され救出されたロシア人女性の証言、この「箱舟事件」に関して記した元島民であるロシア人男性の証言を収録する。たくさんの人に関心を持ってもらえることを願う。（了）

【編集部から】

樫本真奈美（かしもと・まなみ）氏は神戸市外国語大学、同志社大学のロシア語講師。以下のサイトで発信されています。

https://www.facebook.com/manami.kashimoto.73/?locale=ja_JP

◆「棹前こんぶ」とは「成長した昆布猟の解禁を棹入れ（さおいれ）といい、棹入れ時より前に採取する昆布のこと」。以下のサイトを参照。

https://honbamon.com/product/46-saomae-konbu/index.html

◆志発島（しぼつとう）とは、ウィキペディアによれば「歯舞群島を構成する島の一つで、同群島の中で最大の面積を有する。いわゆる北方領土の一部である。第二次世界大戦前の人口は二一四九名。ロシア名ゼリョーヌイ島（Остров Зеленый「緑の島」の意）。納沙布岬に建立された望郷の塔の展望台から水晶島の彼方にその姿を確認することが可能である。近海には、昆布など豊富な水産資源がある。地名の由来は、アイヌ語の「シペ・オッ（鮭・群在する所）」から。また、島の北東部と南西部には、鮭が豊漁だったことを意味する名前の河川がある。戦前の地図では「塩津島」という表記も見られる。

◆北方領土問題については、渡辺雅司先生の御子息の渡辺玲男氏が中心となって取材を続け北海道新聞社が一昨年に上梓した以下の著作を参照のこと。昨年日本新聞協会賞に輝いた。

――『消えた「四島返還」――安倍政権日ロ交渉二八〇〇日を追う――』

北海道新聞社（編）（二〇二一年九月発行）。